

レモンのゼリー

アルミの弁当箱はコスモスの花があしらわれていた。

蓋を開けていつも通りに頂くお弁当ではあるけれど、それは家族や友人へ、愛情を詰めた、いわば箱庭のごとく芸術的な手紙みたいなものであると私は思う。

私の学生時代、高度成長期の忙しい日々中で、手まめに作ってくれる母のお弁当は、昼まで待てず、友人たちも楽しみにするほど奇麗で美味しかった。決して派手ではなく素朴でありながら整っていた。

母は、おおらかで明るく、人を楽しくさせ、思いやりがある人であった。その性格は料理にもお弁当にも反映されて、そのまま私も受け継ぎ、私の子供達へも伝わってゆく。

甘さと出汁のほんのりとした厚焼き玉子に始まり、シャケか唐揚げか、小松菜などの青菜のお浸し、根菜の煮物、それらを引き立てる赤と緑の野菜たち。おにぎりか、又は白米は、昆布や梅干しが、更に食欲をそそる。

母から子供達へ、妻から夫へ、一日の無事と健闘を願う思いが込められている。

高校時代、私はバレー部に所属し、ある時期、太る事を気にして糖分やカロリーを制限していた。

友人達が、サイダーを飲み、アイスを食べていても、私はトマトジュースだった。ある日のお弁当に母が、レモンゼリーを入れてきた。ゼリーと言っても寒天で固めてあるから、レモンかんである。スイーツを禁じている私には禁断のものである。ひとつ許すと全てが揺らいでしまう。

なのに、なんで。

キラキラ輝く薄黄色のゼリーは、爽やかな香りを放ち「食べなよ。」と、ささやく。私、甘い物たべないんだからね、と、母に苦情を言うのもそんな自分は、悲しい。結局迷ったあげく「ええーい」と、食べてしまうこととなったのだが、その甘さとすっぱさが織りなすレモンの爽やかさは生涯忘れられない物となる。

子供達へ、夫へ、沢山のお弁当を作ってきた。

私は既に 60 才となり、88 才になるその母と、93 才の父、重度の障害を負った姉を看ること既に 10 年となった。

食事を作る事は楽しいことで、なにを作るかワクワクしながら日々を過ごしている。

ただ、糖分をかなり制限をしないと死に繋がる母は、痴呆で、医師からの注意をことごとく無視し、私に「飴くれ、おせんべいをくれ、あんこが食べたい」と、毎日懇願してくる。それを我慢させなければいけない私は、苦行を強いられた境地を思い知る。

どちらがほんとうの愛情なのか。医師は、少しでも悪い数値を、私の精だと言わんばかりに攻める。母は、食べさせろと怒る。毎日が、辛い気持ちで、苦しいなあ、何時まで続くのだろうと、泣きながら空を見上げる日々でもある。幼児のように菓子をねだる母、禁じられその行為は、死に通じると、きつい医師の言葉。究極の境地を思い知る。

しかし、実は、どちらも愛であることを悟る。それに辿り着いた時、ターミナル、終着駅が近い事を思い知る。

私の、魂の根底に培われた、お弁当や料理は、バランスや優しさ、整った情緒を経て、やがて絆を育み、伝承されていく。少し逸脱しても良い。たまにはこうあるべきを崩しても良い。柔らかな和みのある人生を教えてくれた母の優しさが、今の私にも継承されている。

美しく素のままに、レモン色のゼリーを作り、沢山の愛情をもらい、それらを伝承できる喜びを幸せに思う。

今日も日が、上り、神々しく始まる朝に、お弁当や料理を作るさりげない一日が始まる。

瑠璃ネズミ